

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	斎藤 慶子
論文題目	日本バレエ教育史における転換点 —チャイコフスキー記念東京バレエ学校(1960-1964)とソヴィエト・バレエ—
審査要旨	
<p>斎藤慶子の博士学位請求論文「日本バレエ教育史における転換点——チャイコフスキー記念東京バレエ学校(1960-1964)とソヴィエト・バレエ」は、「チャイコフスキー記念東京バレエ学校」の開校(1960)から閉鎖(1964)に至る経緯を、戦後の日本のバレエ教育の志向と、日ソ国交回復後のソヴィエトの対日文化政策とが交わった日ソ文化交流のケース・スタディとして位置付け、日本とソヴィエト双方の未公開資料を発掘・渉猟し、その実態と日本バレエ教育史における意義を明らかにしようとしたものである。</p> <p>林広吉によって創立された「チャイコフスキー記念東京バレエ学校」は5年しか存続しなかったこともあり、閉鎖から半世紀以上過ぎた現在その存在も忘れられかけており、まとまった研究も皆無であった。しかしこの学校は日本に初めて体系的なバレエ教育の方法を導入した、という点で、日本バレエ教育史において画期的な意義を持っていた。それまで帝政時代のロシア・バレエの伝統は、亡命ロシア人のダンサーとの接触によって、個人的なレベルで日本に断片的に伝えられてはきたが、ソ連から優れたバレエ教師を招聘し、当時世界的にも最高水準にあったソヴィエト・バレエの教育法の精髓を体系的に伝えた「東京バレエ学校」の開校は、日本バレエ教育史における大きな転換点になった。それまで日本にはバレエ教室はあっても、バレエ学校は存在しなかったのである。従来バレエにおける日露交流については、来日ロシア人ダンサーの来歴と教育に焦点を当てた個人的な研究が多かったが、本研究は日本に初めて導入されたバレエ学校によるバレエ教育に光を当てた点で画期的なものである。</p> <p>本論文は、それまでの日本におけるバレエ教育史を踏まえた上で、当時の日ソ外交文書や東京バレエ学校の在籍者への綿密なインタビューなど未公開資料を駆使することによって、「東京バレエ学校」の戦後の日本バレエ教育史における意義を明らかにすることに成功している。</p> <p>本論文は次の11章から構成されている。</p> <p>第1章「予備的考察1 日露のバレエ教育史概観」、第2章「日本人によるソ連バレエ受容前史」、第3章「チャイコフスキー記念東京バレエ学校(1960-1964)設立の経緯と冷戦期のソ連文化外交」、第4章「チャイコフスキー記念東京バレエ学校における理事長林広吉の活動」、第5章「チャイコフスキー記念東京バレエ学校の教育」、第6章「予備的考察2 1930～1950年代のソヴィエト・バレエ作品の特徴」、第7章「バレエ『まりも』とソ連のバレエ普及政策としての文化イベント」、第8章「チャイコフスキー記念東京バレエ学校の『白鳥の湖』——『白鳥の湖』ソ連上演史のコンテクストにおける位置づけ」、第9章「チャイコフスキー記念東京バレエ学校閉鎖までの過程」、第10章「チャイコフスキー記念東京バレエ学校のその後」、第11章「結論」。</p> <p>第1章では、ロシア革命までのいわゆるロシア・バレエが日本にどのように伝えられてきたかを明らかにし、第2章では、ロシア革命後に展開したソヴィエト・バレエが1957年のポリショイ劇場バレエ団の来日までの日本でどのように受容されたかを跡づける。第3章では、それを踏まえて、「チャイコフスキー記念東京バレエ学校」が1960年に開校されるまでの経緯を、それが第二次世界大戦後の冷戦期にソ連がとった対外文化政策との関連で明らかにしている。</p> <p>第3章では、本題である「チャイコフスキー記念東京バレエ学校」設立の経緯を、ソ連の外交文書等のアーカイブ資料を博捜し、冷戦期のソ連が日本に対してとった文化政策の一環としてのバレエ教師派遣活動を、日ソ外交史の歴史的な脈から明らかにし、第4章では、「東京バレエ学校」の設立者であり、理事長を務めた林広吉が日本において、またソ連に対して行った活動を、ロシア国立文学芸術文書館、ロシア連邦国立文書館の記録を詳細に閲覧し、明らかにした。</p>	

氏名 齋藤 慶子

第 5 章では、設立された「東京バレエ学校」で実際にどのようなカリキュラムでどのような教育が行われたかを、当時の関係者に対するインタビューや、個人所蔵の各種資料、関連文書、新聞雑誌、プログラムなどの渉猟を通じて明らかにし、第 6 章では、「東京バレエ学校」で行われた教育との関連から、1930 年代から 1950 年代にかけてのソ連でどのようなバレエ作品が製作、上演されたのかを明らかにする。また続く第 7 章では、ソ連で行われていた「民族バレエ」創出の動きとの関連で、アイヌ伝説に取材した創作バレエ「まりも」が東京バレエ学校の公演で上演された経緯を明らかにする。続く第 8 章では「東京バレエ学校」で上演された「白鳥の湖」の特徴を明らかにする。この上演は、日本のバレエ史においてソ連の演出家の直接指導を受けた初の全曲上演であったが、この上演がソ連での上演史のコンテキストの中でどのような位置を占めるのかを明らかにする。

第 9 章では、理事長林広吉の採算を度外視した経営と政治姿勢の変化などによって、「東京バレエ学校」が閉鎖に追い込まれるまでの過程を再び、アーカイヴ資料等を駆使してあとづけ、第 10 章では、東京バレエ学校の存在意義とその閉鎖後の状況について検討している。第 11 章の結論では、以上の議論を踏まえて、日本のその後のバレエ界にこの「東京バレエ学校」の存在が大きな意義を持っていたこと、その後の日本におけるバレエの発展に大きな影響を与えたことを説得的に論証している。

本論文は先行研究に対して次のような点で大きな意義を持つものと考えられる。第一にこれまで主にエリアナ・パヴロワに代表される亡命ロシア人ダンサーの個人的な教育に焦点が当てられてきた日本バレエ教育史に、ソ連のバレエ教育を体系的に導入した「東京バレエ学校」の意義を明らかにすることによって新しい光を当てたことがあげられる。第二に「東京バレエ学校」を通じて日本が受容した同時代のソヴィエト・バレエの歴史的背景を明らかにしたことがあげられる。第三に、戦後の日ソ文化交流史の知られざる側面に新たな光を当てたことがあげられよう。

公開審査会においては、日ソ国交回復後の日本に対するソ連の戦後の文化政策を、バレエ教育への協力のみならず、大衆レベルにおける「うたごえ」運動などとも関連させ、より広い視野から捉えること、東京バレエ学校による民族バレエ「まりも」の公演を、旧ソ連時代の各民族共和国における民族バレエの創出とその理念と関連させて、他の実例と比較しながらより具体的に論じること、など更なる研究の道筋について、希望が出されたが、本研究は「東京バレエ学校」についての我が国最初の綿密かつ実証的な研究であり、この学校の日本バレエ教育史における歴史的意義を明らかにした研究として高く評価されるべきものであることを審査員全員が確認し、博士の学位を授与するに相応しい論文と、審査員全員が認めるに至った。

公開審査会開催日	2018 年 12 月 15 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	伊東 一郎	ロシア文学・ロシア文化	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	源 貴志	ロシア文学・比較文学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・非常勤講師	村山 久美子	舞踊評論・舞踊史	
審査委員				
審査委員				